



小判田遺跡

山茶碗、木製品、土製品、石製品などと、一点の木簡である。この中で量的に多いのは、山茶碗と共に伴う木製品である。山茶碗には、底部外面に墨書のあるものが多數みとめられる。漢字または仮名で文字を記したもの、記号風のもの、判読できないもの、意味不明のものなどである。木製品には、下駄、鉢、漆器椀、櫛、箸状木製品、曲物底板などである。

こうした遺構・遺物から、この遺跡は、一般的の集落跡とは異なる性格を有しているものと考えられている。

8 木簡の釈文・内容

「廿内□□=そ□□□□□か □×

194×13×2 081

山茶碗に伴つて検出された。スギ材。下部は欠損している。

9 関係文献

四日市市教育委員会

『小判田遺跡』(四日市市埋蔵文化財

調査報告12)

一九七七年
(北野 保)

静岡・城山遺跡

1 所在地

静岡県浜名郡可美村阿原・川原

2 調査期間

一九七七年(昭52)十一月～十二月

3 発掘機関

浜松市立郷土博物館(当時、現在は浜松市博物館)

4 調査担当者

辰巳均

5 遺跡の種類

不明

6 遺跡の年代

七～一六世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

城山遺跡は、伊場遺跡の北西約二五〇mに位置している。一九四九年(昭和24)の国学院大学による伊場遺跡の調査に合わせて発掘され、施釉陶器や富寿神宝等が検出されて、官衙跡と考えられている。

一九七七年(昭和52)頃より付近一帯が宅地化されていったため、可美村教育委員会の要請をうけた浜松市立郷土博物館では、同学芸員の辰巳均を調査員として派遣して、遺跡の範囲確認にあたらせた。その結果、七世紀代より十六世紀代に比定される土器群、墨書き土器、輪羽口、瓦、陶枕(唐三彩)、木製品、木簡などとともに、溝状遺構等を検出した。

木簡といい施釉陶器・陶枕・富寿神宝といい、通常一般集落では例をみないものである。このことは、当遺跡が伊場遺跡と同じく第

(川江秀孝)

二砂堤上に立地し、同一平面上に占地している点、伊場遺跡における空白期を埋める時期にあたる点などからして、伊場遺跡とは一連の遺跡と考えることが可能と思われる。

8 木簡の积文・内容

木簡は、柿経の一種と考えられる11点を含めて、計五点を検出した。积文は次のとおりである。



五点のうち三点は中世の資料であって、中世に当地に存在した大日堂との関連が注目される。他の二点は九世紀初頭頃に比定されるものである。

9 関係文献

国学院大学伊場遺跡調査隊『伊場遺跡—西遠地方に於ける低地性遺跡の研究一』(浜松市)一九五三年



1 伊場遺跡 2 城山遺跡